

イギリス女性作家の半世紀

3

70年代・
女が集う



現代女性作家研究会
鷺見八重子 編

イギリス女性作家の半世紀

3

70年代
女子学院図書館
蔵書章
女が集う



現代女性作家研究会
鷺見八重子 編

70年代・女が集う イギリス女性作家の半世紀3

1999年10月25日 第1版第1刷発行

編者 現代女性作家研究会
鷲見 八重子

発行者 井 村 寿 人

発行所 株式会社 勁 草 書 房

112-0004 東京都文京区後楽 2-23-15 振替 00150-2-175253

電話(編集) 03-3815-5277 (営業) 03-3814-6861

FAX 03-3814-6854

大日本法令印刷・和田製本

©SUMI Yaeko 1999 Printed in Japan

* 落丁本・乱丁本はお取替いたします。

* 本書の全部または一部の複写・複製・転記載および磁気または光記録媒体への入力等を禁じます。

ISBN4-326-89885-2

<http://www.keisoshobo.co.jp>

刊行のことは

まもなく二一世紀を迎えようとするいま、この歴史的節目に立ち、第二次大戦以降の半世紀を振り返ってみると、ただちに「壊」のひとことが浮かび上がってくる。ふたつの大戦は歴史に類をみない大仕掛けな破壊行為であった。だがそれとは別種の、社会体制をくつがえすほど大規模な「壊」が、大戦が終結した後じわじわと、女／男たちの意識革命から始まっていたと言えるのではないだろうか。わたしたちは何を壊し、何を創ろうとしてきたのか。何を見直し、何をやり直そうとしているのか。イギリス（英語圏）女性作家が文学作品のなかで「問い」、「壊し」、「集い」、「語り」、「拓く」、その多彩な営為を読み解くことにより、それぞれの時代における価値観の推移とその再編成の特徴がおのずと見えてくる。激しく変化してきたこの半世紀を〈女の視点〉から多角的に検証する——それが、このシリーズの目的である。

現代女性作家研究会は、勁草書房の女性編集者の協力を得て、『現代イギリスの女性作家』（一九八六）、ついで『現代イギリス女性作家を読む』全五巻（一九九一—一九二）を世に送り出してきた。今回のシリーズに登場する作家は四五人、なかには二巻、三巻にわたって登場するものもある。まずはゆ

たかな小説世界とその〈読み〉を楽しんでいただき、そして、現代の様々な問題をともに考える機縁となれば幸いである。

一九九九年 盛夏

編者

70年代・女が集う／目次

序	70年代・女が集う	……	驚見八重子	1
---	-----------	----	-------	---

第1章	湖底からの生還	……	驚見八重子	9
	マーガレット・アトウッド『浮かびあがる』	……		

1	破壊―変容するカナダ	11
2	沈潜―失踪した父のなぞ	18
3	浮上―母・娘・胎児のきずな	24

第2章	不妊なんかこわくない	……	武井 誠子	37
	セアラ・メイブランド『エルサレムの娘』	……		

1	デリラの裏切り	39
2	長血をわずらう女	44
3	ヤエルの殺人	48
4	マリアの出産	52

第3章 子どもたちの闇 園城寺康子 59

スーザン・ヒル『ぼくはお城の王様だ』

1 城での出会い 61

2 いじめの構造 66

3 森への逃走 72

第4章 女性はいかに生きるべきか 岡村 直美 83

ベリル・ベインブリッジ『ボトリング工場の遠足』

1 現代のおとぎ話 85

2 正直に生きるということ 90

3 嘘をついて生きるということ 95

第5章 山を仰ぐ女 榎本眞理子 107

ルース・プロローワー・ジャブヴァーラ『暑さと埃』

1 『インドへの道』再訪 109

2 ピアノのある部屋 113

3 乾季の風景と雨季の風景 114

4	オリヴィアの選択、「わたし」の選択	120
5	ヒマラヤ山脈のかなた	123

第6章

幻想を焼き尽くすインド……

鈴木 和子

131

アニタ・デサイ『燃える山』

1	「ジグソーパズル」	133
---	-----------	-----

2	ナンダの嘘	135
---	-------	-----

3	もう一つの嘘	139
---	--------	-----

4	自由児ラカ	143
---	-------	-----

5	火の神アグニ	147
---	--------	-----

第7章

ローザの選択

……ナティン・ゴディマ『バーガーの娘』……宮澤 邦子

155

ナティン・ゴディマ『バーガーの娘』

1	南ア連邦に生まれる	157
---	-----------	-----

2	隠しつづ語る	161
---	--------	-----

3	どちらの側に立つか	166
---	-----------	-----

4	ローザが選択する	170
---	----------	-----

第8章 世界戦争前夜 …………… 太田 良子 177

イザベル・コルゲイト『銃獵会』

1 一九一三年 秋 179

2 キジ、六一二羽 183

3 アヒルのエルフリーダ 187

4 ドードー神話 193

第9章 〈老い〉のディコンストラクション …………… 窪田 憲子 203

バーバラ・ピム『秋の四重奏』

1 沈黙した一六年の謎 205

2 ヴィオラとチェロの四重奏 209

3 辺縁の〈老い〉 218

4 老いと死と日常 221

5 還ってきたピムと辺縁のまなざし 224

第10章

へはざまへに揺れる風景

……………太田

洋子

231

ピネロピ・フィッツジェラルド『岸を離れて』

1 六〇年代の幻想 233

2 現実からの遊離 236

3 夕闇にかすむ境界 240

4 現実／非現実の再認識 246

5 語り手のパースペクティヴ 250

文献案内 8

索引 3

序 70年代・女が集う

鷺見八重子

ネットワークと言えば、いまではまずインターネットを連想するかもしれないが、たとえば「女たちのネットワーク」というように、この言葉がよく使われるようになったのは七〇年代中頃のことではなかったろうか。そしてネットワークづくりの象徴的なできごとが一九七五年メキシコシティで開催された「国際婦人年」である。世界一三三か国から三千人あまりの代表が一堂に集い、女性に対するあらゆる差別を撤廃するために政治的、経済的、社会的問題を女の視点から論じ合ったのである。しかも一回限りのお祭りではなく、それに続く「国連婦人の一〇年」を経過ウォッチングの期間と定め、女性の人権の着実な前進をはかったことは、ふり返ればまさに画期的な戦略であった。

一九六九年に国連が採択した女性差別撤廃宣言は、その過程で「宣言」から「条約」に高められ、しかも男女平等のとらえかたについて質的な転換がはかられた。あらゆる差別を人権問題として取り上げた「宣言」もたしかに先駆的であったが、七九年に国連総会で採択された「条約」は、さらに一

歩ふみこんで「社会および家庭における男子の伝統的な役割を、女子の役割とともに変更することが、男女の完全な平等の達成に必要である」としている。こうして「男は仕事、女は家事・育児」という性別役割分業を問いなおす核心部分が条文化された意義は大きい。その後の男女雇用機会均等法の施行（八五年）、職場でのセクシュアル・ハラスメント対策、家庭問題としては「シャドー・ワーク」とされてきた主婦業の見直し、家庭内暴力のあつかい、夫婦別姓、非嫡出子の相続権など、社会を変ええる大きな動きは小さな一歩、へ女が集うところからスタートしたといっても言い過ぎではないだろう。

また、この数年すっかり市民権を得た女性学（ウイメンズ・スタディーズ）も同じ一九六九年、女性差別撤廃運動の中から成立したことを知る人は少ないようだ。女性学は最初、アメリカ東部名門女子大学に学ぶ女性たちの大学改革運動の表現形態の一つであった。彼女たちは教育機関の男性中心主義を批判し、大学のカリキュラムに「女性学講座」を設置すること、大学の組織全体を女性にとって学びやすい場に変革することを意図したのである。女性学講座はまたたく間に合衆国全域に広まり、やがてヨーロッパ、多少遅れて七五年には日本へも波及し、生涯学習、ジェンダー・フリー教育へのいしずえとなった。

女性学はもともと研究者としての女性と研究対象としての女性を、フェミニズムの視点と方法によって、学際的に再検討することがその基本である。学際的とは、政治学、経済学、社会学、法学、文学、心理学、教育学、家政学など従来のさまざまな学問体系の研究成果を照らし合わせ、結び合わせ

て、個々のことがらを相互関連的にとらえなおす、という意味でネットワークの一形態といえる。そしてフェミニズムは、社会制度、価値観、慣習、文化、あるいは人々の意識・無意識の中にある性差別を認識し、その撤廃をめざす思想である。具体的には、女性が自己のことばと行動に信頼を置いて自己決定すること、さらに社会における性差別の解消に向けて法制改革・意識改革に努力することを目標とする。

このような女性学・フェミニズム運動の流れの中から、文学批評にも新しいジャンルともいうべき「フェミニズム批評」が誕生した。起爆剤となったのはケイト・ミレットの『性の政治学』（一九七〇）である。ミレットは、あらゆる差別は「支配する性（男）の支配される性（女）」に対する権力維持装置である」とあざやかに言い切ったのだ。この抑圧・支配の構図は、のちのフェミニズム批評の基盤となった。同様に、「個人的なことは政治的なことである」という立場をとるラディカル・フェミニストたち、たとえばシュラミス・ファイアストーン、アドリエンヌ・リッチらは、「結婚、家事労働、異性愛」などを、私的活動ではなく父権的制度としてとらえなおし、生殖・母性についても徹底的な意識革命を可能にした。

この時期、イギリスのウーマン・リブ運動およびフェミニズム理論はアメリカに遅れをとった感があるとはいうものの、ジャーメン・グリアの『去勢された女』（一九七二）をかわきりに様々な市民活動が展開する。また小説の分野では、六五年に「未婚の母」を描いて話題をさらったマーガレット・ドラブルをはじめ、五〇年代から「女の自立」を問い続けてきたベテランのアイリス・マードック、

ドリス・レッシングらがつぎつぎ問題作を発表し、女／男の関係性や差別の構造について、発想の転換をうながさずにはおかぬ影響をあてていた。さらに、あざやかな語り口で女のセクシュアリティを切ってみせた、まさに目から鱗が落ちるフェイ・ウェルドン、そして私たちの無意識にはびこる固定観念をマジック・リアリズムの手法でみごとに覆してみせたアンジェラ・カーターがいる。この二人のめざましい活躍は七〇年代の特筆にあたります。

とくに、男性優位の広告業界（名コピーライター）から転身し、いまなお健筆をふるうウェルドンは六〇年代後半に登場し、七〇年代には『女風情で何が悪い』に始まる長編五作を刊行したが、どの作品にも、女の立場にたいする不公平感と怒りがふつふつと煮えたぎっている。女に生まれたばかりに余計な苦勞を背負い、自分の幸せをおし殺し、不器用にしか生きられない『プラクシス』（一九七八）はなにも特殊なケースではなく、どこにでもあるふつうの女の代表であった。一見ドタバタ喜劇に見えるウェルドンの物語がどれもベストセラーの人氣を博したのは、社会における女の状況への作者の鋭い認識が、読者の熱い共感を得たからにはかならない（『フェイ・ウェルドン 魔女たちの饗宴』勁草書房刊を参照されたい）。

九二年の早春、肺ガンで早逝したカーターにしても、架空の未来都市に永遠の恋人をさがし求める『ホフマン博士の地獄の欲望装置』（一九七二）、男が女に生まれ変わる『新しいイヴの情熱』（一九七七）といった奇想天外なストーリーの中で、現代の性と生についてどんなフェミニズム理論にも引けを取らない問題提起をなし得ている（カーターについては、すでに同じ現代女性作家研究会編『アンジェ

ラ・カーター ファンタジーの森』勁草書房刊において全作品を紹介したので、このシリーズからは割愛した。

発想の転換をうながし、社会に強いインパクトをあたえたという意味では、やはり拒食症、堕胎、生殖管理など最先端の性のテーマを、つぎつぎ独自の詩的ヴィジョンで描くカナダのマーガレット・アトウッドが光っている。この系譜としてイギリスでは、キリスト教的父権制に真っ向から挑むセラ・メイトランド、それに八〇年代に「マリアによる福音書」により注目を集めた新進のミッシェル・ロバート、またこのシリーズでは紹介できなかったが彼女たちと同じフェミニスト仲間の、ゾウイ・フェアベアンズらが続いている。

そして英米フェミニズム批評は、七〇年代も後半になると、男性作家批判から女性作家中心のアプローチへ展開した。とりわけエレイン・ショウォールターの『女性自身の文学』（一九七七）は幅広い影響をあたえてきた。ショウォールターは、葬り去られていた女性作家を掘り起こし、イギリス文学史の再評価を試みたのだが、そうして〈書き手〉としての女性たちに光をあてることにより、〈読み手〉としての読者に、「女性的」とか「女らしさ」といった社会・文化的性差から解放されて、自身のからだや精神のはたらきについて、自分自身のことばで主体的に語ることの大切さを示唆したのである。またS・ギルバートとS・グーバーの『屋根裏の狂女』（一九七九）も男性中心の批評に対する鋭い問題提起である。男が描く女の典型的なイメージは従来、「天使」または正反対の「狂女」か「魔女」であった。この二重性に注目した二人は「狂女」を女性文学の謎を解くキーワードとして作

品を読む。たとえば、男が女に期待する役割をこばみ屋根裏の狂女とされた『ジェイン・エア』のバーサに関する分析は、とくに深い洞察にあふれている。

こうした作品の読み直し・再評価の一環として、還ってきたバーバラ・ピム、イザベル・コルゲイトらを読むことができる。しばらく忘れられていた作家の復活は、時代とともに経験を深めた作家の変化もさることながら、読者の〈読み〉が変化した結果であったともいえよう。視点をずらしてみると、それまで気づかなかった問題やテキストに隠されていた意味が見えてくるからだ。ただ七〇年代も末になって、旧体制に属するとみなされていた年輩の作家が再評価されたのは、もしかすると勢いづいたフェミニズムに対する反動の力がはたらいたのかもしれない。あるいはサッチャー政権誕生のもと、コルゲイトが暗示するように、第一次世界大戦（グレイト・ウォー）の意味を問う機運がたかまったのかもしれない。さらに、作家としてのスタートは遅いがピムと同世代の、ピネロピ・フィッツジェラルドのブッカー賞作品『岸を離れて』（一九七九）〔邦訳『テムズ河の人々』（一九八一）〕には、早くも六〇年代の検証が始まるきざしが見える。

一方、若い世代では、子どもの世界を描くときとみせて人間の深層にひそむ原罪を見せるスーザン・ヒルや、日常性のなかに出現する非日常的なできごとを不思議な異空間のなかで展開してみせるベリル・ベインブリッジらが好評のうちに迎えられた。ヒルの『ぼくはお城の王様だ』（一九七〇）はノーベル文学賞の対象となったウィリアム・ゴールディングの名作『蠅の王』（一九五四）に比べても遜色ないし、昨今の小中学生による殺人事件にも通底する衝撃的な作品である。ベインブリッジは、日